

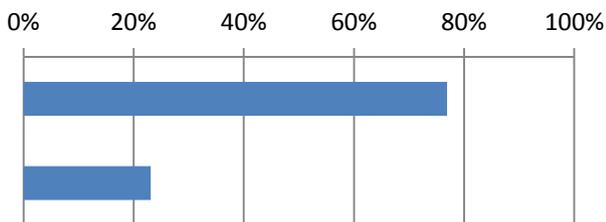
心理学分野における授業での情報活用能力育成の取り組みについて

1. 回答率 12%

依頼教員数	733 (名)
回答教員数	91

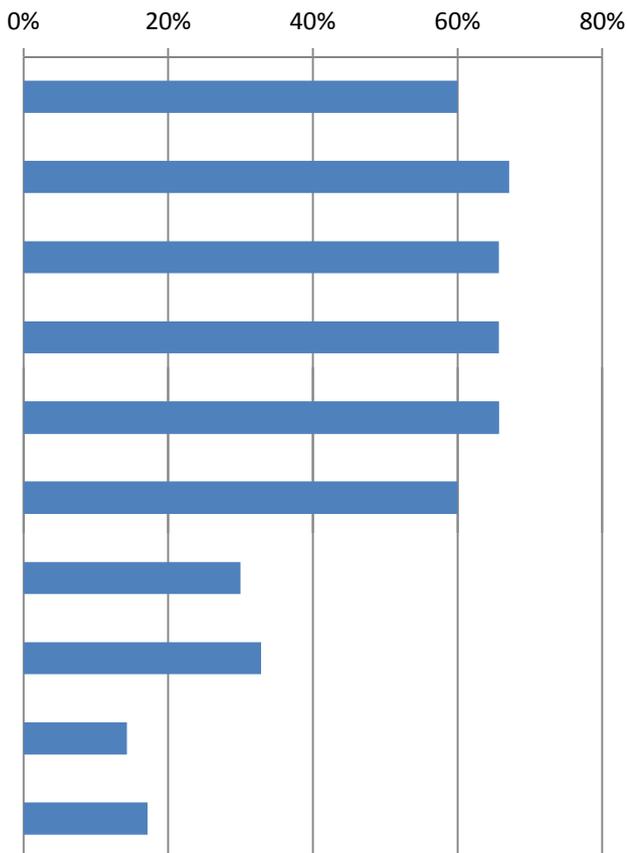
2. 情報教育育成への取り組みの割合

項目	人数	割合
実施している教員	70	77%
実施していない教員	21	23%



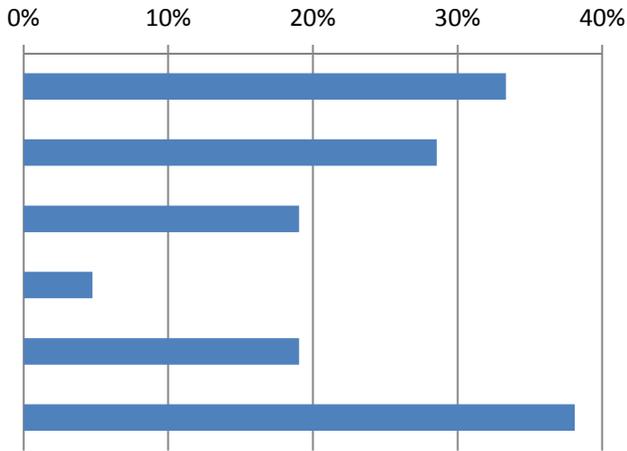
3. 情報活用能力育成への取り組み状況

項目	人数	割合
情報検索・処理・発信に関する基本的な技術を利用できる	42	60%
心理学関連の文献、資料の所在を知っており、またインターネット情報の限界を知り、目的に応じて適切に検索することができ、その情報の信頼性を評価できる	47	67%
適切な引用方法を知った上で、収集した情報に基づいたレポート作成やプレゼンテーションができる	46	66%
研究目的に応じて科学的に行動を観察し、数量化することができる	46	66%
収集したデータの解析(適切な解析方法の選択と実施)を行い、その解析結果を評価、解釈することができる	46	66%
倫理的側面に配慮した研究計画を立てることができる	42	60%
アンケート調査、心理検査にインターネットを利用することの可能性と限界を理解できる	21	30%
心理学実験にコンピュータを用いることができる	23	33%
ウェブサイトやブログなどから、様々な人間の異質性や多様性の存在を認識できる	10	14%
ウェブサイトやブログなどから、社会現象の背後にある人間の心や行動を理解できる	12	17%



4. 情報活用能力育成を実施していない理由

項目	人数	割合
初年次・キャリア教育で実施している	7	33%
授業を進める上で情報活用能力を意識する必要がない	6	29%
授業で教える時間がない	4	19%
学習の支援体制が不足	1	5%
情報活用能力を指導する力が不足	4	19%
その他(情報授業で実施。他の授業科目で指導されている。主目的、範囲ではない。)	8	38%



5. 今後取り組まなければならないと考えている教育内容

項目	人数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%
情報検索・処理・発信に関する基本的な技術を利用できる	27	30%							
心理学関連の文献、資料の所在を知っており、またインターネット情報の限界を知り、目的に応じて適切に検索することができ、その情報の信頼性を評価できる	45	49%							
適切な引用方法を知った上で、収集した情報に基づいたレポート作成やプレゼンテーションができる	45	49%							
研究目的に応じて科学的に行動を観察し、数量化することができる	29	32%							
収集したデータの解析(適切な解析方法の選択と実施)を行い、その解析結果を評価、解釈することができる	31	34%							
倫理的側面に配慮した研究計画を立てることができる	35	38%							
アンケート調査、心理検査にインターネットを利用することの可能性と限界を理解できる	19	21%							
心理学実験にコンピュータを用いることができる	17	19%							
ウェブサイトやブログなどから、様々な人間の異質性や多様性の存在を認識できる	8	9%							
ウェブサイトやブログなどから、社会現象の背後にある人間の心や行動を理解できる	11	12%							
その他(授業とゼミの融合化。質的資料の分析。3,4年生では取組が当たり前のことに思われる。通常の講義科目では考えられない)	5	5%							

6. 教育内容の例

課題回答のウェブ掲載、学友回答への批判・評価の書き込み、反論書き込みの推奨
一学期を通して心理学実験を作成するためのプログラミング技法を実習を通じて教え、最終課題として実験を作成させている。
3年次生の演習にて順次発表形式で実施しており、学生は発表のための資料をインターネットで検索して取得するよう指導しています。検索サイトとしてグーグル・スカラーを推奨し、紀要レベルならテキスト全文取得可能だが、研究論文として高度なものはなかなか無料では得にくいとも言っています。また、授業の第一回目に図書館に案内して、館内PCにて各種検索サービスを利用できる案内を係員から受けています。
コーチングの授業では、会話の発話数をグラフ化、コーチングで発する音声刺激を解析ソフト(フリーの音声解析ソフト)で表示するなどして、どのような声(コーチング)をだせば、相手に伝わるかなどをメディア媒体を活用して講義している。グラフの表示は、言葉以上の理解がある。また、音声ソフトで声の状態を可視化することで、学生の意欲や関心が高まった。
1年次配当の科目で複数教員によるオムニバス形式の授業。 私の担当回では、1回目に、レポートの書き方を説明する中で、文献や資料の引用のしかた(および剽窃という概念、情報の信頼性の吟味、倫理的な問題点)を重点的に説明します。そして、大学のHPから図書館にいき、居ながらにして、蔵書検索、Ciniiなどのデータベースからの文献検索、政府統計の総合窓口からの公的統計(官庁統計)の利用などができることを知ってもらい、課題に取り組んでもらいます。例えば、公的統計を引用し、グラフ化やデータ解析をし、その統計から訴えたいことを述べてもらいます。さらに訴えの背景や根拠を示す公的統計を探して加えていってもらおう。2回目は、多くの学生が興味を持ってくれる職業理解や自己理解に役立つサイトを紹介し、関心のある職業について、その業務内容や特徴、それに就くためにはどのようなことが必要か(資格、求められる能力等)、どのような経路があるのかなどを調べてもらおう。教育効果を測定してはいませんが、課題はそれぞれの関心と能力に応じて誰もが取り組める内容なので、まじめに、しかも楽しんで取り組んでもらえるように見受けられます。
心理学関連の文献、資料の所在を知っており、またインターネット情報の限界を知り、目的に応じて適切に検索することができ、その情報の信頼性を評価できる能力を身につけさせている。 研究目的に応じて科学的に行動を観察し、数量化することができる能力を身につけさせている。 収集したデータの解析(適切な解析方法の選択と実施)を行い、その解析結果を評価、解釈することができる能力を身につけさせている。

<p>1) 学生を5～6人毎の小グループに分け、実験課題の設定、目的、仮説、実験計画、実験材料等を設定させている。インターネット(CiNii)を利用して、文献探索を行い、グループの課題にそって文献を活用するようにしている。</p> <p>2) 実験材料を作成するにあたり、主にPowerPointを利用している。</p> <p>3) 実験結果を個人毎に集計し、助手のwebサイトに登録して集計データを作成する。</p> <p>4) 実験結果の分析には、SPSSを使用している。</p> <p>5) 実験をまとめて全体でプレゼンテーションを行っている。学生はPowerPointを使用してポスターを作成して発表を行う。</p> <p>6) 最終的に個人毎のレポートを提出させている。主にWordにExcelで作成した図や表を貼り付けるなどの方法をとっている。</p> <p>これら一連の作業を通して、学生は、文献検索、実験材料の作成、データの収集、データ分析、発表用資料の作成等を一貫して学習することになる。これにより、4年次の卒業論文では自発的にこれらの作業を行えるレベルに到達している。</p> <p>この作業は心理学の学習に留まらず、将来職業に就いたときに、有効に利用できると考えている。</p>
<p>エクセルを用いた自作統計ツールの利用により、検定についてのアレルギーを減らすことに成功しています。加えて、レポート執筆の際に統計的検定を用いた結果記述ができるようになったと思われます。</p>
<p>適切な引用方法を知った上で、収集した情報に基づいたレポート作成やプレゼンテーションができる能力を身につけさせている。</p> <p>各回の授業で、学生に2名ずつ、自身の関心に沿った研究テーマについて文献・情報を調査させ、それを30分程度の内容にまとめプレゼンテーションさせている。さらに、発表者以外の学生と質疑応答を15分程度行わせている。</p>
<p>心理実験に関してはプログラミングの能力に重点を置いている。文献に関しては医中誌をはじめとする医学系の文献情報収集能力にも力を入れている。</p>
<p>毎回の授業で小さい課題をだし、翌週提出させ、教員がチェック。返却する。その際に、内容についての評価に加え、引用方法、データの活用方法についてもコメントを付ける。</p>
<p>文献を検索・収集してレポートする場合、出典を明確にし、すでに発表されているデータや意見がどこまでで、発表者独自の観点・主張がどこからどこまでなのかを明確にするよう随時指導している。</p>
<p>上記にはあてはまりませんが、大学独自のネットワークシステムTIESを用いて、学生のe能力アセスメントおよび学習ポートフォリオの活用を推進しています。</p>
<p>実験実習の授業では、結果の処理に統計処理を行うが、SPSSなどのソフトを使って、解析している。</p>
<p>それぞれのトピックについて色々なソースからできるだけ最新で、幅広い情報を集め、発表する。</p>
<p>適切に文献を検索する。レポート作成能力の向上。ネット上の統計プログラムの利用。</p>
<p>卒業論文作成のために、資料収集のために使用。</p>
<p>事例の取り扱いについて、倫理がどのように関係するかについて、具体的な話を入れている。関連文献を紹介し、自分で調べるように話をしている。事例の中で、心理臨床的分析の仕方について話をしている。</p>
<p>1つの授業でというより、昨年まで担当していた「心理コンピュータ実習」と授業で上記の内容について触れることが多かったのと、ゼミの卒業指導で研究者としての倫理性とか資料収集など一通りのことは指導します。教育効果については、心理学研究を行う基本的なスキルが身に付き、卒業論文の作成や発表会もありますので効果的なプレゼンへと結実しているかと考えています。</p>
<p>実験的研究を指導する場合、立案、施行、データ分析、記述、発表をひとまとめとして、段階的に実践・処理できるように心がけている。これらの指導が十分になされると、結果としては、卒業研究、修士論文あるいは博士論文の公刊がなされることになる。</p>
<p>心理学での調査法の演習を行い、そのデータ処理(Excel,SPSS)、論文の書き方(ライティング)を半期15回で指導する。3年次後期の配当なので、来るべく4年次の卒業論文のプレ・卒論として、徹底したトレーニングを、TAをつけて、1人1台のパソコンを使って演習している。双方向のLANが配置されたコンピュータ室で、最初に情報リテラシーの自己申告を行わせ、座席を、「得意」「不得意」「得意」・・・と配置し、授業中のピア学習も推奨している。</p>
<p>「基礎演習」の講義の中で、図書館の利用を通してデータベースの検索方法、利用上の注意事項などを、図書館職員から指導を受ける。その上で、グループごとにテーマを設定し、資料の収集と検討の上、発表会を行う。夏休み中にスタディーツアーを計画。教育効果は、スタディーツアー後に検討。</p>
<p>仮説検証のための実験方法の習得、客観的データの取得、統計解析、客観的かつ論理的なレポートの作成、等をすべてコンピュータを用いて行わせている。</p>
<p>通常の講義ではパワーポイントを用いて講義している。図や表など板書ができないものの提示には適している。しかし、スライドのハンドアウトを受け取ることで、良しとする学生が見受けられることも確かであり、パワーポイントに穴埋めを利用するなどの工夫が必要と考えている。</p>
<p>特に重視している点としては、「収集した情報に基づいたレポート作成」の能力育成です。GeNiiやその他の文献検索システムとGoogle等の通常の検索サイトを使って、自分で実際に興味のあるキーワードで検索し、そこで得られた文献を要約してまとめる作業を行います。そして、心理学研究法では、それらの文献をもとに研究計画を立てます。基礎実験では、授業で行われた実験や調査の研究テーマについて、文献を収集し、レポート作成で活用します。その際に、インターネット情報において、情報の信頼性や信憑性に留意することと信頼性の判断基準について伝えます。また、レポートでは文献引用と剽窃について繰り返し、繰り返し伝え、レポートについても内容だけでなく、引用方法についても赤ペンを入れ書き直しをさせています。アナログではありますが、繰り返し書くことを重視した教育を行っております。</p>

卒業研究の指導の中で実施、教材は論文及びGenii・magazineplus,Psycarticlesなど
3年生の専門ゼミでは、課題研究(ゼミ論文作成)を実施している。各自の関心あるテーマに沿って、文献検索、インターネットからの情報検索を行う。文献資料をレビューし、問題の所在、リサーチクエスションの設定、卒業研究計画の立案を行う。実証的な研究を4年生で自立的に行う能力が習得できる。
1. 学生同士のグループ・ディスカッションを通じて、実験計画を立て、データ収集をする。その際に、倫理的な側面などについても考えさせ、適宜助言を行う。 2. 収集したデータを、コンピュータで定量的に分析させ、解釈させる。適切な分析方法だけでなく、結果の解釈にも適宜助言を行う。 3. 学生自身がデータベース等を使って日本語・英語の学術論文を探し、そのPDFファイルなどを入手して、講読・発表を行う。インターネット・リテラシーだけでなく、文献の探し方や引用の仕方などについても、適宜助言を行う。
講義科目のため、概説に留まることが多いが、世論調査に関連して個人情報保護法を概説した上で、調査時の留意点について説明している。また、時系列的に内閣支持率を新聞・テレビ間で比較することにより調査の限界と発表データの見方について解説し、リテラシーを高めるよう配慮している。
「心理学基礎実験」「臨床心理学演習」のいずれにおいても、統計パッケージを利用し、適切な解析方法、結果の評価および解釈ができるように指導している。また文献、資料をCiNii、PsycInfoなどを利用させ、目的に応じた検索が速やかにできるような能力を身につけさせている。その結果、レポートの作成能力、プレゼンテーション能力が向上している。
3年次の専門演習では、4年次での卒業論文・卒業演習における論文作成のための基礎的能力を高めることを教育の目的としている。そこで、この授業では、インターネットを利用しての文献検索および文献収集の方法を習得すること、および、収集した言語データを分析する基本的な方法を習得すること、更には、得られた結果をまとめパワーポイント等を用いてプレゼンテーションする技術を習得することを目指している。
図書館での文献検索等が、自らできるように、ノートPCでCiNiiなど利用体験を試みている(図書館職員の協力依頼を通して)。
代表的な科目は知覚心理学だが、その他、心理学研究法、基礎ゼミ等で、上記にチェックを付けた研究に関する基本的な事項を教えている。情報検索、文献:GiNii, CiNii, PubMed, google scholar等検索サイトを利用した情報収集と情報の信頼性、信ぴょう性。レポート、プレゼン方法の指導。科学的な観察、数量化、研究倫理については心理学研究法で教えている。アンケート調査、心理検査に関する限界も同様。実験のためのプログラム講習会を行っている。
学生自身が心理検査の被験者となり、自らの検査結果を分析し、レポートを作成するという授業を実施している。検査の取り扱いに関する倫理や守秘義務、被験者者に及ぼす負担や検査結果がもたらす影響などを講義の中で解説しつつ、学生たちは自らが被験者になり、結果を分析することを通じて、上記のことを体験的に学べるよう工夫している。また、学生たちには実験のたびにレポート作成を義務づけており、授業担当者もすべてのレポートを添削し、合格点に達していない者には再提出をさせている。
受講生の興味に応じた研究テーマを設定し、実験、質問紙などによってデータを収集、初歩的な統計的手法を用いてデータを分析して考察を行い、レポートとしてまとめるまでを実習形式で指導しています。複数人でのグループワークを中心におこなっていますので、極めて限定されてはいますが、小さな研究共同体として協同的な学習ができるよう心がけています。
心理学関連の文献の検索方法の徹底、インターネット情報の限界について周知させる。その結果、情報の一般的な意味での信頼性について留意するようになった。
Excelを使用してデータを整理し、SPSSを使用してデータ分析し、下級生で学んだ統計学の知識を利用して、分析結果を解釈できるようになること。
データ解析の部分に重点をおいています。臨床心理学という、どうしても心理面接の技法や心理検査が中心となりがちですが、実証科学的側面として、データの収集と分析を取り入れるようにしています。SPSSという統計ソフトを使っていますが、学生が安価に使えるものとしても紹介しております。
観察(計数)、インタビュー、紙アンケート、ネットアンケートと、目的に応じた複数の調査を実施させている。ネットアンケートは、LimeSurveyシステムを用いたサーバを構築し、アンケートフォームを学生自身で作成させている。データ解析にはExcelとSPSSを用い、目的に応じた解析の選択と実施をさせている。調査をしたら必ず結果をPowerPointでプレゼンさせている
インターネットを用いた情報収集は研究活動に於いても必須の行いであるとの認識に基づいて学生達には積極的な活用を促している。ただし、情報の信憑性と正当な活用における倫理遵守については厳しく指導しているつもりである。 研究における論証・検証の過程において要請されるエビデンスのうち、インターネットの利用によって初めて確認できる映像記録資料も多数あり、これら資料の正当な活用に関して十分配慮するよう指導している。
授業は毎回コンピュータールームにて行い、いつでも電子データや検索システムにアクセスできる状態にしている。また、データの分析に不安のある学生からの質問を適宜受け付け、その場でハンズオンで分析の指導をし、また、インターネット上のサンプルプログラムをができるようにしている。これらを通して、グループでの作業が非常に円滑に行われるようになった。
一方向的な講義が中心の心理測定法での授業内容を、別の、演習中心の授業で、活用させている。受講者を4,5人のグループに分けて、調査しないしは実験の計画を立てさせて、自分たちでデータを収集し、結果を分析し、考察をおこない、プレゼンテーションをおこなう。

7. 大学として必要な課題への意見

- ・ 学内設備の充実、学習支援者の増員、
- ・ 学生の情報収集と活用の徹底指導、教員の研修体制の充実、授業中の補助教員の充実(個別指導の充実のため)
- ・ 教員の資質向上及び支援体制

- ・ 教員の情報活用能力に大きな差があり、科目によっては適切ではない情報活用が教育されている可能性がある。まずは教員が正しい知識を身につけ、インターネット等の活用を学生に教育する必要があると思われる。
- ・ 最近の学生は「剽窃」に対する問題の認識が非常に甘いと感じている。この点について、個々の大学での取り組みだけでなく、全国的な取り組みの必要性を感じる。
- ・ 初年次導入科目としての情報教育科目との連携・接続を図り、専門学士力の向上に資するようなカリキュラム改訂を行うこと。
- ・ 倫理的問題など考慮でき、情報的確実に活用できるためには、そのことを目的とした授業や演習を必修として設けることが必要であろうが、現在多くの科目を設定して学生にとっては過重なカリキュラムの中でどのようにすればよいかを学部全体で考えることから始めねばならない。
- ・ ワードやエクセルを使うことに対して苦手意識を持っている学生は、1年生の情報処理の初級科目を履修したがいず、履修してもソフトを実際に使う頻度が低かったり、練習する機会が少ないため、習ったことを忘れてしまっていることが多い。基本的な能力が身につくまで、継続的に反復して学習する機会が必要で、苦手意識の高い学生には、TAによる補助を細やかに受けられるように、サポートする人員を確保して学習環境を整えることが大切。
- ・ 大学在学中に、ある程度の情報活用能力を目指すためには、それなりの授業を置くという時間の配分や、学習支援者が必要である。
- ・ 担当教員の領域によって重要性が異なっているが、教員間の情報交流を行う必要性と、学生が心理学の基礎教育でどのようなことを学んでいるかと言うことについての共通理解がやや不足している。これらは教員間の情報交流の場が少ないからだと考える。
- ・ 心理学における情報収集、活用、レポート執筆といった一連の過程を学ばせる科目の開設。とても大変かもしれませんが、1日すべてを用い、午前中は実験、午後はデータ解析といったような科目を開設したいと考えています。
- ・ 大学全体の枠組みで学生に対して情報検索・活用の研修指導を行うことは意味があるが、各学部にも固有のニーズもまた存在し、ケースバイケースな事例もあるので全体的な指導では補えない部分もある。そこで、学部個別に図書室を設け、そこに教育・学習支援者を常駐させることで、常にオンデマンドに情報検索・活用の指導を行える場面を設置する必要があると考える。
- ・ 論文執筆やプレゼンテーションについては、Open Office や LaTeX といった無料のソフトウェアを使うことも可能であるが、将来社会に旅立つ学生の教育という点では、やはり Microsoft 社や Adobe 社のソフトウェアについての教育も行わざるを得ない。しかし、学生にとってこれらの製品はアカデミックプライスとはいえ、安価なものとはいえない。学生がこういう有料の製品を使う場合に、企業側が設定しているアカデミックプライス以外に、文科省などからなんらかの経済的支援が受けられるような制度があると、教育を行う側も授業がやりやすくなる（特に近年の不況で、学生の置かれている経済状況は大変に厳しいものがある）。
- ・ 膨大な情報を入手しても自分で考察し、自分なりの論を再構成する力に欠ける学生が多い。情報の圧倒的な量に振り回されてしまっているのが実情。データ収集の手法や情報の所在を知るだけでなく、そのデータを集める目的の明確化と論を立てて思考する力をまずは育てる必要がある。
- ・ 学習管理支援システムの構築、教育・学習支援者の確保
- ・ 情報を捨てる力を学生にどう持たせるのか。そのためには、コンピューターや情報を中心課題とするのではなく、逆の発想が必要かもしれません。たとえば、読書やボランティア活動など、コンピューター以外をどのように充実感をもって学生が過ごせるようになるのかを考える必要があるように思います。
- ・ 情報過多時代における情報入手のリテラシー。正しい情報と怪しい情報の区別、個人情報保護の保守、安易な情報発信のリスク
- ・ 学年を追っての、段階的教育プログラムをしっかりと作り、実践することが大切である。
- ・ ポートフォリオシステムなどを活用した学生個々の学習成果の把握と指導への有効な利用法の確立
- ・ 学習の効果や動機づけを高めるための教員と学生の双方向の授業システムの構築
- ・ 収集した多様な情報を把握して論理的にまとめるための力の育成
- ・ 学内のICT活用のプロジェクトも立ち上げ、ライティングに関するeラーニング等のシステムの計画もしている。
- ・ 研究方法として、情報活用のための基本を身につける授業が必要である。
- ・ 新入生を対象にした、1) 情報収集能力の育成、2) PPを利用した発表能力の育成、3) 基本的なレポートの書き方など。
- ・ 初年次教育においては全学的なガイドラインが、卒業論文については学科別にガイドラインが作られています。演習など他の授業に関しては各教員の裁量に任されている現状があります。今後は演習の在り方などについても学科別に協議し、ガイドラインを作成する必要があると思われます。
- ・ 授業で必要とする時に使用できるだけの、十分なPC教室および台数を確保すること。PCを使用しながら学生が試行錯誤する(そのタイミングで指導する)ことで得るものは大きい。つまりハードの確保。大学にしかできないこと。
- ・ 一つの授業でということではなく、カリキュラム全体として上記の能力を身に付けさせることが必要だと思います。そのためには、ディプロマポリシーの中に組み込み、それに基づいてカリキュラムマップを作っていくことが望ましい。しかし、そのためには、教員の教育力向上のための支援体制が不十分である。
- ・ どのような学生を育てるのか。これは、大学や地域、国、世界それぞれで異なります。本学の場合は、入学してくる学生の多くは学力が高いとは言えません。そのため、初年次教育やリメディアル教育に力を入れざるを得ないのが現状です。しかしながら、文科省が示す学士力は非常にレベルが高いため、なかなかそのレベルを達成することができません。そのためにも、専門的な学習支援システムや組織が必要と考えます。大学院のない小さな大学では、少ない教員におおきな負担が掛かってしまいます。また、現状にあった学士力の定義、たとえば細部の能力まで設定するのではなく、大学ごとに定義ができることも必要だと思います。4年間で育てる能力には限界があると思われるので、もう少し、緩やかに定義することができれば現状に合わせた教育を考えていくことができるのではないかと考えます。
- ・ 基礎教育での情報活用能力の養成は時間的に無理だが、専門教育では、文献の検索、データの統計処理と解析方法、プレゼン等で活用は必須。こうした能力が向上しないと、心理学関係ではいい研究はできないと思います。

・心理学の学士力達成のために必要とされる情報活用能力は、質的にも量的にも年々拡大している。それに対して、情報教育プロパーではない心理学の教員の方が、必ずしもついていけない現状がある。学士力の達成は、心理学だけでなく大学全体の課題なので、IT技術や情報活用能力の開発をサポートする組織的・人的サポートを、大学全体として考えてもらえるとたいへん助かる。あるいは、教員のFDの一貫として位置づけ、教員のIT能力の開発をサポートする講座などを、大学として準備するなど。各教員の自助努力に任せては、学士力の達成という意味では、たいへん心許ないのではないだろうか。

・質問紙調査が問題になっている。心理学研究の中で、質問紙調査の果たす役割、限界について、伝える必要があろう。

・講義科目において上記全ての能力の育成を行なうことは不可能であり、ゼミナールのような少人数・演習形式の授業科目を増やすことによつてのみ可能と考える。

・倫理的教育の充実

・初年次教育において、文献および資料の検索指導がより一層充実すること、インターネットを利用した調査の倫理的問題点、限界などについての指導がより一層充実することで、学科専門科目の指導のスタートラインを高めることができるのではないかと考える。

・学士力としての情報活用の力を明確にして、1年からの必修科目として位置づけている。また、マイクロソフトオフィススペシャリスト資格取得への指導体制がある。1年次から基礎演習など全員が参加している教科において、段階的に能力のアップがはかれるようにカリキュラムが検討されている。教員の教育力向上のための情報機器の活用等についての研修会をFDの一環として継続して実施している。

・大学院に臨床心理士養成課程があることから、教員の担当コマ数が常態的に過剰となっている。そのため、学生に対するきめ細かい情報活用能力育成のための取り組みが十分とは言えないところがある。そこで今後は、教育・学生支援を行う助教やTAを十分に確保していくことが必要である。

・学生には、情報処理、ネットワーク、プログラミング等の基本事項を初期から徹底的に。

・文献検索については、図書館が年度初めに希望者を集めてレクチャーしているが、個々の学生たちが実際に文献収集をしなければならなくなったときにも、そうした情報収集について指導する場は必要であると感じる。

・情報活用能力は様々な科目で必要とされ、また育てることができるものですので、複数科目で協同してそうした能力を育てていけるような仕組みづくりが必要ではないかと思っています。

・これからの人材としては、情報活用が施設運営にも期待され始めているため、現在、2年からICTコースを設けている。その評価とブラッシュアップが今後の課題。

・情報活用能力は、個人差が大きい。したがって、授業科目に組み込むことで、学生の情報能力のバラツキの是正、能力の向上を図る必要がある。

・多様な情報検索の提供とインターネットだけに頼らない授業の工夫。そのために図書館などとの有機的な連携。ただし授業準備その他に膨大な労力がかかるので、持ちコマ数の多い状態では困難である。一つ一つの授業の充実を目指すなら、そういった環境の整備が必要。

・全学的な情報活用科目が充実しており、また、所属学部においても、情報検索、文献講読、統計、プレゼンテーション、プログラミング等の演習が個別にカリキュラム化されており、数としては十分と思う。ただし、各演習・各担当教員間の連携が乏しく、重複や穴があると感じている。

・情報収集と情報活用における関連の倫理規程を準備し、その実践に関する教育体制(講習などの義務化)の整備が必須であると考え。文献検索・文章資料・映像資料などの情報収集の具体的方法に関する指導を行う体制を整備し、実践する。

・基礎科目の中に位置づけられる情報処理系の科目、統計関係の科目、専門科目(例:認知心理学)を、別々の科目ではなく、連続した科目とする。